

智儼と義湘系の華嚴思想

——五海印説をめぐつて——

木村清孝

法蔵と義湘はともに智儼に学んでゐる。二人の心のつながりも決して浅いものではなかつたらしい（『寄海東書』参照）。

けれども、二人が、またその継承者たちが把握し展開した思想にはかなりの相違が認められる。中でも義湘系華嚴の特徴は、「海印」および「陀羅尼」の捉え方によく示されているようである。本論はこのうちの「海印」に関する一考察であり、五海印説をめぐる諸問題の一端を明らかにしようとするものである。

さて、華嚴教学では、海印三昧は華嚴一乗教義の依つて立つ根本定であるとされる。しかし実際には海印三昧は大般若経・大集経など種々の大乘經典に説かれ、華嚴経に限られたものではない。また華嚴経においても、数ヶ所に「海印三昧」の語や関連記述が見え、海印三昧の力による「一切の示現」を説く（賢首品）とはいえ、經典自身がそれを一乗教義の根定的な三昧としてゐるのではない。杜順説・智儼撰とされ

智儼と義湘系の華嚴思想（木村）

る一乗十玄門においてはじめて華嚴の思想と海印三昧との深い連関が、海印三昧のはたらきによるあらゆる相對の「同時具足相応」という形で主張されたのである。この著作は六二八年の成立と伝えられる搜玄記と前後する時代のものであろうが、一方の搜玄記では、海印三昧にとくに触れているところは少ない。ともかく、この一乗十玄門の思想から智儼の海印論は後期の五十要問答、孔月章へと移つて、その姿をはつきりさせてくる。すなわち、五十要問答（上）では諸仏の顯現が釈迦仏の海印定力に依ることが述べられ、さらに孔月章（四）において、

一乗同別教義、依海印定起。普眼所知。三乗教義、依仏後得法住智説。聞思修及報生善意識、并内証梵行勝智、及真實智所知。此約別相説。

と説かれる。この海印三昧の解説は、端的に智との関わり、主体的世界との対応を示している点でニュアンスを異にする

が、規定そのものは法蔵の基本的把握に連続するものである。同じく孔目章（二）には、「無尽円通教門」に依れば、あらゆる法数や教えが「海印定中に在つて成ずる」から一乗の所目であり一乗であるとも説かれていた。

従来、智儼の海印論は上述したところを基本として考えられてきた。このことは間違つてはいないし、法蔵教学との関係を見る限りは、それで十分であろう。しかし、これとは別に一つの伝承がある。それは「海東華嚴初祖」義湘の門流に伝えられる五海印説である。この説が智儼のものとしてされ、しかも義湘系の華嚴思想史上、小さくない役割を果たしている。五海印説の検討が必要とされる所以である。次に、説示の経緯を記した部分も含めて、五海印説に関する一文を記しておこう。同じ類型の中に、海印の段階づけが整然となされていることに注意されたい。

雲華尊者云。唯花嚴經所説之法、依海印定起也。

時 有智積国統難云。大集經云。如閻浮提一切衆生身及外色、如是色相海中皆有印相。是故名大海為印。菩薩亦爾。得大海印三昧、見一切衆生心行。云云。則下四教法亦依海印定起。何如云不爾耶。雲華答曰。海印有五。一者三大阿僧祇劫歷修之帝釈昇法空須弥山頂、与所知障阿修羅鬪戰之時、三科百法像現於大円鏡智海中之海印也。二者不可數劫歷修之帝釈升本覺須弥頂、与根本無明阿修羅相戰之時、恒沙性德像現於一心真如海之海印也。三者一念不生之

帝釈升一行三昧須弥頂、与妄想阿修羅相戰之時、無相、無分、別像現於不二実相海之海印也。四者、弘刹微塵數劫歷修之帝釈升總相須弥頂、与遍計阿修羅相戰之時、十種普法像現於世界海之海印也。五者十仏之帝釈升法性須弥頂、与無住実相阿修羅相戰之時、三種世間像、現於国土海之海印也。

そこでまず、智儼とこの五海印説が結びつく可能性について検討してみると、第一に、この説は義湘系以外の諸文献にはおそらく少しも触られていない。第二に、前記の智儼の三つの著作における海印三昧の卒直・明快な論じ方とこの説とは異質の感をまぬがれない。これらのことから、むしろ五海印説は智儼のものではなからうという判断に傾く。けれども、その全体の構成の仕方や、そこに踏まえられている思想などによって積極的にそう断定できるわけでもない。

たとえば、帝釈と阿修羅の関係になぞらえて海印を語る点であるが、六十華嚴の賢首品にはその発想を生み出しうると思われる偈文が存在する。それは、

如淨水中四兵像 各々別異皆明了
 刀劍輪戟衆兵器 如是等仗皆悉現
 随其器仗本形相 悉現於彼淨水中
 水影四兵無僧愛 是名大仙定自在

である。このあとには「天と阿修羅と鬪戦せる時、阿修羅衆すなわち退散す。心大いに恐怖して奔走し、四兵悉く藕絲の

孔に入る」などとあるから、上の「四兵」が阿修羅の軍隊を意味していることは明らかであろう。また、ここにいう大仙定は確かに海印三昧に似ている。それゆえ法蔵のように、この詩偈をそのまま「海印の徳にたとえる」とみることもでき。ただし、智儼の搜玄記では、これは「実徳離非の喩」と規定され、海印との関係は全く述べられていない。だがこれだけによって五海印説と智儼思想の断絶を証明することはできない。一つの大きな理由をあげれば、智儼には明らかに年代的に思想の変化があるからである。

また、海印三昧に五を立てるということも、智儼の教判的な立場から類推して、可能性がないことではない。この五海印は、法界図記叢髓録（下ノ一）所載の「古記」、および一乘法界図円通記（上）のいずれにも、第一は初教、第二は終教、第三は頓教、第四・第五は一乗に配され、第四は外化、第五は内証をあらわすという。このうちの第四・第五はそれぞれ、より一般的に、同教と別教に当てうる側面をもっている。そもそも智儼の教判はまだ一定してはいない。ここにあげた形の五教教判そのままのものはかれの現存著作中には認められないようであるが、三乗を初教と終教に区別すること、頓教を重視しつつ立てること、一乗を同別に分けることは、しばしば用いられている方法である。だから、さまざまな教判的意識が統合され、かつ修正が加えられて、上の五教

にもとづく海印三昧そのものの種別化が絶対に行なわれなかつたとはいえないのである。

以上に五海印説の全体の構成について一・二のべたが、個々の思想内容や用語の点にも智儼においてはありえないと断言できるだけのものはない。こうして、五海印を智儼が説いた可能性は幾分でも残ることになる。そして叢髓録は、これのみを智儼の海印論として紹介するのである。

だが一方では、義湘あるいはその周辺、またはその弟子の誰かが智儼に仮託したものであるという推測も成立つ。次に五海印説と義湘の唯一の著作とされる一乘法界図との間を探ってみよう。

一乘法界図は周知のように、「印」の形に組まれた七言三十句の詩と、これに対する釈とから成る。詩の部分は智儼の作であるという説もあつたようであるが、これは一乘法界図円通記の冒頭で均如が主張するように、ともに義湘の作とするのが妥当であろう。

さて、海印三昧についていえば、本書ではまず、「印」の形式をとる理由として、

欲表釈迦如来教網所撰三種世間、從海印三昧槃出現顯故。

とある。海印三昧にもとづく三種世間の現成が説かれるわけである。またこの詩のうち「利他行に約す」とされる四句、すなわち

能入海印三昧中 槃出如意不思議
兩宝益生滿虛空 衆生隨器得利益

の第一句に対しては、次のような注釈がなされている。

「印」者約喻得名。何者是大海極深、明淨徹底。天帝共阿修羅闘
諍時、一切兵衆、一切兵具、於中離（顛力）現了分明。如印顯
文字。故名「海印」。「能入」「三昧」亦復如是。窮証法性、無有
源底。以究竟清淨湛然明白、三種世間於中顯現。名曰「海印」。

これら二つの文を通してわれわれは、一乘法界図の海印論
と五海印説が接近したものであることを知りうる。とくに、
天帝と阿修羅の戦いが海印の説明に持ち出されること、およ
び海印・法性・三種世間の関係が、五海印説の第五に内容的
に一致することが注目される。なお、天帝と阿修羅の譬喩
は、明晶の『海印三昧論』でも採用されている。

では、義湘以後の朝鮮華嚴の海印論は、どのような方向に
動いていったのであろうか。この観点に立つて叢髓録および
円通記を見てみると、基本的な海印論の特徴としてさまざま
の面から海印の分類・体系化が進められていることがあげら
れよう。たとえば、十句章円通記（下）に従えば、法融は忘
像海印と想像海印とを対応させ、均如は海印を広門と略門と
に分ける。また融質は海印分相門と海印通相門を立てたとい
う。さらに法界図記叢髓録（上ノ一）には、三種世間のそれぞ
れに海印を密着させる考え方も示されている。ところが他

方、このような動きと並んで、当面の問題である五海印説か
らの展開と目される思想が生まれている。

その第一は、一乘法界図の全体の解釈に際して、五海印を
もつて配釈するという説である（法界図記叢髓録、上ノ一）。五
海印説の上に一乘法界図を重ねて理解しようとするのである
から、この立場では五海印説が非常に重視されていることが
わかる。智儼と義湘の連続性・一体性、さらに華嚴の伝統の
正統性を暗に主張するものかもしれない。

第二のタイプは、五海印説をベースとする六海印および十
海印の説において示される。すなわち、五海印説の拡充完全
化の方向である。まず六海印説とは、五海印の第四・第五の
一乗の海印は「果海印」に約するものと見、もし「因海印」
を開くとすれば、という条件のもとに第六の海印を加える説
である。第六の海印とは、叢髓録（下ノ一）によれば、

普賢之帝釈升解行須弥頂、与百障阿修羅相戰之時、無尽普法像現
於鏡光玻瓈鏡之海印也。

をいう。ただし円通記の記述ではこの「普賢」が「普財童
子」となっている。前者の方が直接依つていると思われる経
典の思想には忠実なようであるが、原文がどうなつていたか
は厳密な意味では不明である。またかりに智儼の思想に還元
してみた場合も、どちらが本来的であるかは決しがたい。一
乗の実践は普賢をもつて象徴的に示されるのが一般的ではあ

るが、より現実的・具体的な実践過程を尊重する立場では、善財童子にその典型を見ることも許されてよいと思われるからである。一つの推測をいえば、あるいは均如の実践性が「普賢」を「善財童子」と読みかえさせたのかもしれない。しかし今は、どういうパターンの海印が新たに追加されたかを述べれば足りる。

次に十海印、または十重海印の説は、十句章円通記(下)に示されるものである。十句章には忘像海印と現像海印など五重の教義の相対が説かれるが、均如はこれをふまえて六種の海印を主張し、さらに五海印説のうちの第三まで、すなわち三乗の三海印を採つて九重の海印を数える。そしてこれに「小乗海印」、あるいは表訓に従い根本としての「不可説不可説」を加えて十重海印とするのである。五海印説を基本とする海印論の方向は、華嚴思想の究極性を象徴する「十」の適用にまで達したということであろう。

今まで論じてきたように、義湘系華嚴における海印三昧の重視とその独自の展開は、智儼に帰される五海印説を大きな支柱としていると考えられる。義湘系華嚴は、いわば五海印説の発想と論理構造の型を受容し拡大したのである。

智儼が実際に五海印説を提唱したかどうかは疑問である。智儼の海印論に関していえば、現在の資料の範囲内ではむしろ

ろその中に五海印説を直接組入れることは避けたほうがよろう。だが、それにもかかわらず、義湘系華嚴の人びとにとっては、五海印説はまさしく義湘の師智儼のものであった。五海印説を抜きにして智儼の海印三昧論は存在せず、五海印説の創唱者としての智儼こそ、自らの信じ依拠する智儼であった。一乘法界圖を原点とする義湘系華嚴の教学は、五海印説が智儼の思想の結晶であつてはじめて確固とした權威を獲得しえたといえよう。

1 離世間品には菩薩の十眼の第十としてあげられ、「平等法門見法界故」と説明される。智儼はかつて搜玄記(一)で「普眼とは五眼自在智を具するが故に普なり。また十眼を具すなり。理量ひとしく知るがゆえに普というのみ」と解釈している。

2 五教章巻頭および華嚴經伝記巻頭。ただし詳しくみると法蔵の海印論は一律ではない。たとえば凝然は、「海印」というは真如本覚なり。安んじ、心澄み、万象齊しく現す(安んじ還源觀)の海印を果体とし、この上に「一切の万象を印現す(同)および「類に随つて殊形を示現す(探玄記、四)という二つの用がある」とみる(通路記、二)。また南紀の芳英は二門五別を立てる(南紀録、四一五)。すなわち、性起一心門と縁起理事門に大別し、前者に本覚一心・菩薩定心・仏果菩提の三つを攝し、後者に法性融通門・縁起相由門の二門を置く。

3 引用は法界図記叢隨録(下ノ一)に従つた。五海印説そのものに関して、均如の一乘法界圖円通記(上)・十句章円通記

(下)の引用にも文意の上での大差はない(ただし前者は「雲華答曰」の前の全文を欠き、後者は、その要点を記すのみ)。

しかし思想的に一応注意されるのは、傍点を付した語が次のように変わっていることである(前者を④、後者を⑤で表示)。

性徳↓④万徳 妄想↓④⑤妄念 無相無分別↓⑤離相離分別
実相↓④なし 二仏↓④二仏世界 総相↓④総相中道 遍計
↓④分別遍計 像↓④之法

4 このほか入法界品にも数ヶ所、帝釈と阿修羅の関係は触れられ、内一ヶ所では帝釈が「法須弥頂」に住するものとして示されている。

5 一例をあげると、智儼は「如来藏・仏性の体はただこれ普法、ただこれ真法なり」(五十要問答、下)とのべ、これを「同教一乗の義」とみなす。同教と第四の海印との思想的対応性がここに認められよう。また華嚴独自の仏身論として二種十仏説が立てられ、解境の十仏が「第八地三世間中の化身・衆生身等なり」と論ぜられることは、別教の立場と第五の海印との深い連関を窺わせる。

6 仏小相光明功德品では、業報のあり方を譬えるために用いられている。そして、この段に続く普賢菩薩行品で「百千障礙法門」がいわれ、これに対する十種の正法が説かれて、普賢の実践の内容が順次展開されていく。第六の海印が、經典の叙述を踏まえていることが知られよう。

寄稿されなかつた諸氏の発表題目(六)

nihāna に ついて	田辺 和子
中国における大集経の編纂について	谷上 昌賢
還相廻向の一考察	谷本 信之
口伝法門における日本天台の多極化について	田村 完誓
江戸前期における真迢と日尊の論争について	丹治 智義
法然浄土教における雑行諸行余行について	坪井 俊映
最澄と道元	角田 春雄
唯識枢要の仏性問題	中島 省悟
禅における説教の方法について	中野 東禅
プラマーナ・ミーマーンサーの体系	長崎 法潤
梵文悲華経・陀羅尼品について	長島 尚道
法然浄土教成立への反論について	成田 貞寛
一乘真實の意義に就いて	西 義雄
阿弥陀三諦思想について	西村 岡紹
聖岡教学について	服部 英淳

(一三四頁につづく)